

ISBN4-901730-63-0

ティップス先生からの7つの提案

教員編



名古屋大学高等教育研究センター

ティップス先生からの7つの提案とは

この冊子は、名古屋大学の学生・教員・大学組織がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイデアをまとめたものです。

名古屋大学の先生方は、すでにさまざまな優れた授業を実践しています。本冊子は、主に学内での調査を通じて収集した教育実践例をデータベース化し、教授法研究や学習理論研究の成果に基づいて、それらを整理し、簡潔な表現にまとめて提供するものです。

この冊子のねらいは、教育評価の基準を提供することではなく、名古屋大学に埋もれていた優れた教育実践とそのための知恵を明示化し、大学の全構成員が共有するための枠組みを提供することにあります。優れた授業を通して教育効果を高めるためには、学生・教員・大学組織の三者の努力が同じ方向に向かって統合されていく必要があります。授業改善を教員の努力のみに求めることは効果的とは言えません。大学組織の支援も重要ですし、学生が主体的に授業に参加する姿勢をもつことも大切でしょう。

たとえば、オフィスアワーを例にとってみましょう。最近多くの大学では、オフィスアワーが導入されていますが、必ずしも学生の利用が期待どおりには進んでいないと言われています。オフィスアワーを通じた教育が、より充実したものになるためには、まず大学組織はオフィスアワーを制度化するだけでなく、教員と学生が気軽に話せる場所を提供することが大事です。また、教員も単にシラバスにオフィスアワーの時間帯を示すだけでなく、授業の中で「気軽に研究室に来なさい」と伝えたり、研究室のドアを開放して歓迎の意思表示を行うことが必要でしょう。さらに学生自身も授業でわからないことをそのままにしないで、教員の研究室に足を運ぶといった積極的な学習態度を身につける必要があります。こうした三者の取り組みがお互いを支え合ったときに、はじめて目標が達成されるのです。

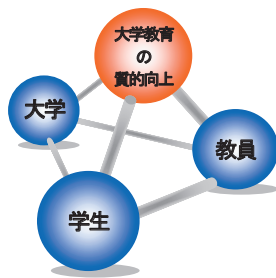


図 大学教育の質的向上を支える学生・教員・大学組織

以上のような考えに基づいて開発したため、『ティップス先生からの7つの提案』は教員向け、学生向け、大学組織向けの三分冊からなっています。それぞれ教員、学生、大学組織がよりよい授業を実現するために、役に立つ提案を7つの短い文章にまとめ、それぞれの提案のもとにすぐにでも実行可能なアイデアを7つずつ配置しました。それぞれの分冊は、他の2つの分冊と内容的に関連づけられており、教員、学生、大学組織の三者の視点から同じ目標が達成されるようになっています。また、『ティップス先生からの7つの提案』という名称をつけた理由は、高等教育研究センターにおいてすでに開発された授業の秘訣集である『成長するティップス先生』と本冊子が相互に補完的関係にあるためです。

本冊子を作成するヒントになったのは、米国高等教育学会で開発された『優れた授業実践のための7つの原則』でした。この原則を参考にしながら、日本の大学での活用をめざし、名古屋大学が蓄積してきた事例、独自の調査、教授・学習理論研究の成果を用いた結果、オリジナリティの高いものが作成できたと自負しています。

ティップス先生からの7つの提案の使い方

この冊子は、以下のように使うことができます。

1. 7つの提案は、覚えやすい簡潔な文章からなっています。ご自分が日頃気をつけていること、努力していることを整理して、体系化するための枠組みとして活用できます。
2. 49個のアイデアの中には、自分では実践したことのないような項目も含まれているでしょう。その中でご自分の授業に取り入れてみたいものがあつたら、ぜひ実践してはいかがでしょうか。とはいえ、すべてを実践する必要はありません。ご自分の個性や授業の目的に照らして有効と思われるものを見つけてください。
3. 学生向け、大学組織向け冊子もぜひ一読ください。三分冊は同じ目標を達成するために教員、学生、大学組織の三者がそれぞれ何をしたらよいかを関連させてあります。とくに、学生向け冊子をクラスに配布して紹介すると、授業改善のためのあなたの取り組みがより効果的になるでしょう。
4. この冊子に含まれているアイデア以外に、さらに優れたアイデアを実践されている方もいるかもしれません。あなたが日頃の授業で大事にされていること、あるいは工夫されていることを高等教育研究センターまでお伝えください。次回の改訂に活用させていただきます。

提案 1

学生と接する機会を増やす

集団の中の一人として見なされるときよりも、一人の個人として見なされるときの方が、学生は授業に対する帰属意識や責任感を持つものです。授業への参加度を高めるためにも、学生と接する機会を増やしてみましょう。学生にとって自ら積極的に教員に接することは勇気がいる行為なので、教員からきっかけをつくってあげることも大切です。

- クラスの学生に出会ったら声をかける
- 学生にオフィスパワーを積極的に利用するようにすすめる
- 学生に自分のメールアドレスを公開し、eメールによる質問を受けつける
- 授業終了後しばらく教室に残り、学生の質問に答える
- 自分の研究内容について話す
- 学生が教員に親しむための親睦会を開く
- 学生が主催する勉強会やイベントに参加する



提案 2

学生間で協力して学習させる

クラスメイトが仲間になれば、学生は授業に参加しやすくなります。さらに、それぞれの学習方法や考え方の違いを認め互いに補い合うことで、授業内容をより深く理解することが期待できます。ただし、協力的な関係を持った学習活動は自然にはなかなか起こりにくいので、協力して学びやすい雰囲気や仕組みづくりを心がけましょう。

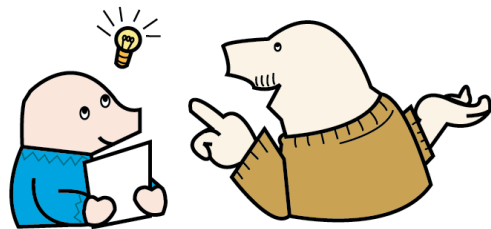
- 学生同士で協力して学ぶことの重要性を伝える
- 初回の授業では学生がお互いに知り合える活動を取り入れる
- 授業時間の内外において共同で行う課題を出す
- 少人数のグループに分けてディスカッションを行う
- 学生のグループで利用できるメーリングリストや電子掲示板を設定する
- 学生が提出したレポートや答案の内容を受講生全体で共有する
- 学生間でそれぞれの課題を評価し合う活動を取り入れる

提案 3

学生を主体的に学習させる

受け身の学習では高い学習効果を期待することはできません。また、大学教育においては、主体的に学習する姿勢を学生に身につけさせることも重要です。授業を担当するにあたっては、授業の内容を充実させるだけでなく、それらの内容をどのように主体的に学ばせるのかについても配慮してみましょう。

- 主体的に授業に参加することの重要性を伝える
- 授業ではすべての学生に発言・質問する機会を与える
- 授業の中で学生の課題を発表させる
- 学んだことを他の学生に教える活動を取り入れる
- 学生が個別に研究活動をする機会を設ける
- 授業をよりよくするための学生の提案・アイデアを歓迎する
- 授業内容に関連する研究会やインターンシップなどを紹介する



提案 4

学習の進み具合をふりかえらせる

学生にとって、どこまで学習目標に近づいているのかを確認することは、その後の学習を進める上で貴重な情報です。また同時に、教員にとっても授業の進め方をチェックするよい機会となります。学期の途中でも大事な内容を教えた直後に、小テストなどによって学習の進み具合をふりかえる機会を与えましょう。

- 授業の内容が理解できないときは教員に伝えるようにすすめる
- 小テストや宿題を課すことで学生の進捗状況を常に確認する
- 良かった点を褒め、同時に建設的なコメントを与える
- 出席票に質問や意見を書かせ、次回の授業で回答する
- 試験の答案やレポートを一週間以内に返却する
- テスト終了直後に解答例を学生に配布する
- 学期中に1回以上、個々の学習成果に対して詳細なコメントを与える



提案 5

学習に要する時間を大切にする

授業時間外の学習の大切さは広く理解されてきたようですが、どのように学習時間をやりくりしたらよいかにとまどう学生も少なくありません。時間を有効に活用することは、学生の学習成果を左右するきわめて大切な要素です。教員は、授業への取り組み方の指導や課題を通して、学生に学習時間を管理する方法を身につけさせましょう。

- ➡ 日常的な学習や学習計画の重要性を伝える
- ➡ 授業は時間通りに始め、時間通りに終了する
- ➡ 授業の予習・復習や課題に取り組むために必要な学習時間量の目安を伝える
- ➡ 授業には毎回出席して、学習に集中するように求める
- ➡ 大きな課題の場合には、段階的な締切をいくつか設定する
- ➡ 学生に発表させる時は、事前にリハーサルをするように求める
- ➡ 重要な文献は教材集などの形で早い時期に学生に渡しておく

提案 6

学生に高い期待を寄せる

学生は、教員や周りの期待に対し敏感に反応するものです。学生は期待されていないとわかったら、学ぶ意欲を衰退させ、結果として学習効果は低下するでしょう。授業のさまざまな場面で学生に対して期待していることを伝えたり、努力すれば手に届く具体的な目標を設定したりすることで、学生の学ぶ意欲を刺激してみましょう。

- ➡ 学習する内容が学生の将来において持つ意味を考えさせる
- ➡ 毎回の授業の始めにその日の学習目標を板書し、口頭でも説明する
- ➡ がんばって取り組まなければ達成できない課題を用意する
- ➡ 意欲的な学生向けに発展的内容の文献や課題を用意する
- ➡ 大学院の授業を見学する機会を与える
- ➡ 授業内容の延長上にある最先端の研究を紹介する
- ➡ 優れた答案やレポートの例を紹介し、どの点が優れているか説明する

提案 7

学生の多様性を尊重する

大学はさまざまな学習スタイルや属性を持った学生を受け入れることで活力を生み出しています。教員は、そうした多様性を尊重するとともに、学生にもそのことを伝えていく必要があります。また、学生の多様性は授業を阻害する要因と見なすのではなく、学生の視野を広げ教育効果を高める一手段としてとらえてみてはいかがでしょうか。

- ➡ 自分と異なる考え方や背景を尊重することの重要性を学生に伝える
- ➡ 学生間の経験、興味・関心、学習スタイルの違いについて知る努力をする
- ➡ 予備知識が足りない学生のために補習教材を用意する
- ➡ 障害をもった学生のために補助器具や教授法の工夫などの便宜をはかる
- ➡ 映像教材、ディスカッション、グループ学習などの多様な学習活動を用意する
- ➡ 他の学生に対する差別的発言や攻撃的な言動をしないように求める
- ➡ 教員自身が持つバイアスやステレオタイプに敏感になる

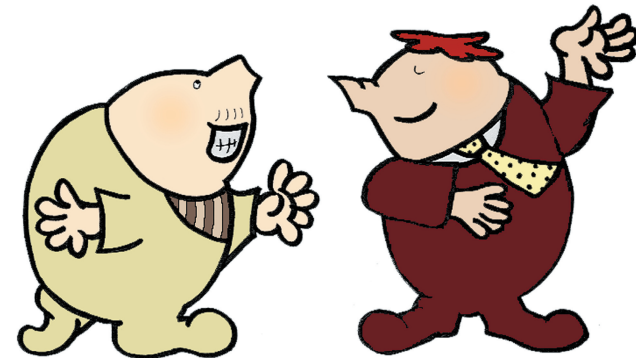
お知らせ

1. 本冊子に収録できなかったアイデアや他の分冊の内容を知りたい方のためにホームページを作成しました。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

2. 『ティップス先生からの7つの提案』の4番目の冊子として、IT活用授業編が加わりました。インターネットやメールなどのITを活用して教員が授業の質を向上させるアイデアがまとめられています。
3. この冊子をお読みになった感想、改善案、本冊子に含まれていない重要なアイデアなどのコメントをぜひお寄せください。また本冊子をご入手の方もご一報ください。

連絡先: メールの場合は、info@cshe.nagoya-u.ac.jp
学内便の場合は、高等教育研究センター宛



本冊子作成のために参考にした主な文献

池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹(2001)『成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部.

デイビス, B. G. (香取草之助訳)(2002)『授業の道具箱』東海大学出版会.

中井俊樹・中島英博(2005)「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号, pp.283-299.

中島英博・中井俊樹(2005)「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『大学教育研究ジャーナル』第2号, pp.71-80.

名古屋大学教養教育院(1998-2005)『豊かな教養教育を目指して—共通教育の方針・事例集』各年度版.

名古屋大学高等教育研究センター(2005)『実践的教授法の開発を目指して—「成長するティップス先生」の記録 2004.08-2005.03』特色GPシリーズ1号.

名古屋大学高等教育研究センター(2005)『「ティップス先生からの7つの提案」の開発』特色GPシリーズ3号.

Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) “Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”, *AAHE Bulletin*, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.

Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1989) *Faculty Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.

開発スタッフ

名古屋大学高等教育研究センター

戸田山 和久

夏目 達也

近田 政博

中井 俊樹 (プロジェクトチーフ)

鳥居 朋子

中島 英博 (現在、三重大学高等教育創造開発センター)

青山 佳代 (現在、名古屋大学評価企画室)

イラスト

スコール株式会社

ティップス先生からの7つの提案〈教員編〉

2005年9月1日 第1版 第1刷

2006年7月1日 第1版 第2刷

著者 名古屋大学高等教育研究センター
名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-5696

info@cshe.nagoya-u.ac.jp

印刷 株式会社ダイテックホールディング
名古屋市東区主税町4-85
TEL 052-856-6645 FAX 052-856-6646
odp@daitec.co.jp

© 名古屋大学高等教育研究センター

2005. Printed in Japan

ISBN4-901730-63-0